平和ナガサキ

（中学生用　平和学習資料集）

長　崎　市

はじめのことば

皆さんは原爆被爆都市長崎に生活する市民として，小学生のときから，原爆被爆の実相や戦争の悲惨さなどの平和学習を積み重ね，平和の大切さについての思いを高めてきました。

皆さんは今，平和な生活を送っています。しかし，多くの尊い人命と幸せな生活を奪い去った原子爆弾や戦争の惨状を学び，皆さんの心に深く刻み込むことによって，平和の大切さを将来にわたって語りついでいかなければなりません。

ここに，平和学習のための資料として「平和ナガサキ」を作成しました。皆さんがこれからさらに平和を学ぶうえで役立てて欲しいと思います。

そして，日常の平和学習をとおして，世界平和を願う熱い思いを受け継ぎ，21 世紀の世界に平和の大切さを自分なりに発信できるよう努力を続けてほしいと思います。

もくじ

1　被爆前の美しい長崎 …… 1

2　長崎に原爆が落とされるまでの歴史的背景 …… 2

3　長崎に原爆が落とされるまでの動き …… 4

4　原子爆弾の被害・惨状 …… 6

5　被爆者の声 …… 9

6　被爆建造物等の紹介 …… 11

7　被爆者に対する援護や現状 …… 15

8　核兵器廃絶に向けて …… 16

9　長崎の青少年が参加している平和活動 …… 17

（表紙）平成 20 年度世界平和祈念ポスター・標語展　中学・高校の部　優秀賞
長崎市立山里中学校 1 年　大野　梨夢さんの作品

1　被爆前の美しい長崎

長崎は九州の西端にあり，港を中心に繁栄してきた港湾都市です。

1570（元亀元）年に当時の領主大村純忠によって港内の長い岬に６つの町が開かれ，翌 1571 年のポルトガル船来航以後，海外貿易の窓口として発展してきました。当初住民はおよそ 1,500 人でしたが，ここを中心に背後の地をひらき，周囲の海を埋め立てて長崎の町は広がっていきました。長崎という地名も，この長い岬から起こったといわれています。

領主大村純忠は，最初キリシタン大名といわれ，開港間もない長崎をイエズス会に寄進しました。キリシタン領となった長崎は，日本におけるキリスト教布教の中心地として天主堂や病院が建てられ，繁栄しました。しかし，1588（天正 16）年に天下統一を図る豊臣秀吉によって没収され，奉行が治める直轄地となりました。また，貿易と宗教を分離するための禁教令も発せられました。江戸時代に入り，1636（寛永 13）年には，長崎の有力町人 25 人に資金を出させて出島を築造し，ポルトガル人を収容しました。また，翌 1637 年に起こった島原の乱によって，幕府のポルトガルに対する警戒がますます強まり，1639 年に出された鎖国令によってポルトガル人は出島から追放され，日本は鎖国時代へと突入しました。しかし，その後も長崎はオランダや中国との貿易港，鎖国時代唯一の貿易窓口，海外文化の伝来地として発展し，開港から約 100 年後の 1672（寛文 12）年には，80 か町，１万１千戸，人口６万４千人を擁する西国一の都市となりました。

その後，1853（嘉永６）年に徳川幕府が 200 年余りに及ぶ鎖国に終止符を打つまで，長崎は日本をめぐる世界各国との交渉の場としての重要な役割を果たしました。幕府は，1859（安政６）年に世界各国との通商を開始しますが，この揺れ動く通商開港の時期，長崎西役所（現在の県庁）に海軍※1伝習所を開設し，その付属施設として対岸の飽ノ浦に※2長崎熔鉄所を創設しました。これが日本海軍の発祥となり，日本近代工業の先駆となりました。

長崎の近代化は，1885（明治 18）年からの港湾改良工事に始まり，これに前後して近海・遠洋航路も始まり，海運業の発達は造船業に飛躍的な発展をもたらしました。長崎熔鉄所は官営から三菱造船所に受け継がれ，長崎の基幹産業に発展していきました。本格的に事業を開始した後の 40 年間で約 350 隻の船を建造し，大正初期には世界第３位の建造量を誇る造船所となりました。一方，港の活発な動きにつれ，明治 20 年代後半から 30 年代初めにかけて，長崎港口に砲台が建設されるなど長崎の要塞化が進められました。

1889（明治 22）年には市制がしかれ，面積７㎢，79 町 11 郷，人口５万４千人，ほかに 13 か国，約１千人の外国人が在住する港湾都市＝長崎市が発足しました。日露戦争の前年 1903（明治 36）年には，人口 15 万人，日本第７位の大都市に発展しました。

大浦海岸通り　　長崎大学附属図書館　所蔵

※１　伝習所　　学問や技術を学ぶ場所。

※２　長崎熔鉄所　長崎造船所（前長崎製鉄所）の前身。

２　長崎に原爆が落とされるまでの歴史的背景

原爆が投下されるまで日本はどのような道を歩んできたのでしょうか。ここでは，近代国家を目指した日本が明治維新から太平洋戦争まで進んでいった道を確認しましょう。

明治維新

江戸幕府にかわり新しくできた新政府は，日本を近代国家とするための学制，兵制，税制の三つの改革を中心とする富国強兵と呼ばれる政策を推進しました。また，殖産興業を進め産業を育成するとともに文明開化により欧米の考え方や文化が取り入れられました。

アジアの植民地化と日本

19 世紀の後半には資本主義が発展した西欧諸国やアメリカ，ロシアなどの列強により，アジア侵略が強まりました。日本も朝鮮に進出しなければ列強の植民地とされる恐れがあると考え，軍備増強をはかっていきました。1894（明治 27）年，朝鮮での内乱に日本と清の両軍が出兵し，日清戦争がおこり，戦勝により賠償金とともに台湾を獲得し植民地として支配しました。しかし，ロシアらの要求により獲得した遼東半島（リアオトン）を返還させられました。清での義和団事件の鎮圧の際に出兵したロシアが，事件後も満州に大軍を駐屯（ちゅうとん）させ，韓国まで進出し，1904 年，日露戦争がはじまりました。

やがて，両国とも戦争を継続することが困難となり講和しました。この戦争の後，韓国への日本の影響力が強められ，1910 年に併合されると太平洋戦争の終結まで日本の植民地として支配されました。1914 年には，第一次世界大戦が欧州を中心に４年余り続きました。戦後，ドイツの中国での権益を日本が引き継いだため中国で反日運動が高まりました。また，朝鮮でも独立を求める運動が活発になりました。

日本国内の動き		世界の動き	
1854 年	日米和親条約	1840 年	アヘン戦争
1858 年	日米修好通商条約	1858 年	イギリスがインドを併合
1868 年	明治維新	1885 年	フランスがベトナムを征服
1871 年	日清修好条規	1886 年	イギリスがビルマを併合
1876 年	日朝修好条規	1890 年頃	アフリカの分割が終わる
1894 年	日清戦争	1897 年	大韓帝国（韓国）改名
1895 年	下関条約・三国干渉	1898 年	アメリカがフィリピンを統合
1902 年	日英同盟	1900 年	義和団事件
1904 年	日露戦争	1910 年	日本が韓国を併合
1918 年	シベリア出兵	1912 年	中華民国建国
1923 年	関東大震災	1914 年	第一次世界大戦（～18 年まで）
1931 年	満州事変	1919 年	三・一独立運動
1932 年	「満州国」建国		五・四運動
	五・一五事件		ベルサイユ条約
1933 年	国際連盟を脱退	1920 年	国際連盟発足
1936 年	二・二六事件	1929 年	世界大恐慌
1937 年	日中戦争（～ 45 年まで）	1930 年	ロンドン海軍軍縮条約
1938 年	国家総動員法	1939 年	ドイツがポーランドに侵攻し第二次世界大戦がはじまる
1940 年	日独伊三国同盟		
1941 年	日ソ中立条約		
	太平洋戦争（～ 45 年まで）	1943 年	イタリアが降伏
1945 年	沖縄戦，原爆投下，ソ連参戦，終戦	1945 年	ドイツが降伏

満州事変，日中戦争へ

第一次世界大戦後の西欧諸国の復興による日本製品の輸出の減少，さらに関東大震災などにより不況下にあった日本経済は，世界恐慌の影響も受け，いっそう深刻なものとなっていました。都市には失業者があふれ，農村では飢えに苦しむ人がたくさんいました。

1931（昭和６）年，軍部は満州事変を起こし，直ちに満州を占領し，翌年には，満州国を建国させ，実質的に支配し，大陸への勢力を伸ばしました。さらに，1937 年には，北京郊外での武力衝突をきっかけに，日中戦争が始まりました。日本軍は，中国北部から南部に向け，主な都市や鉄道を攻撃し，同年

末には首都南京を占領しました。首都南京攻略では多くの中国人の一般市民にも犠牲が出たといわれています。しかし，中国軍と国民は，アメリカ・イギリスなどの援助を受け，抵抗を続けました。その結果，この戦争は，いつ果てるともない泥沼・全面戦争へ発展していきました。

そして太平洋戦争へ

長期化する日中戦争の打開策として，中国への援助ルートの寸断・石油などの資源確保を目的に，東南アジアに植民地を持つイギリス・フランスなどが戦力の主力を欧州に注いでいる機会を利用し 1940 年にドイツ・イタリアと軍事同盟を結び，翌年ソ連と中立条約を結び北方の安全をはかり，日本軍は東南アジアへ兵を進めました。

アメリカとの日中戦争打開の交渉も並行して行われていましたが，うまくいかず，1941 年 12 月８日，日本軍はイギリス領マレー半島北部に上陸を始め，同日，ハワイの真珠湾でも奇襲作戦を行い，太平洋戦争が始まりました。

この結果，戦場は，中国から東南アジアへ，そして太平洋の島々にまで広がり，さらには欧州戦線とも結びついた世界中の国々をまきこんだ戦争へ展開していくこととなりました。

日本国内での状況「ほしがりません勝つまでは」

日本政府は，この戦争はアジア全体を欧米諸国から解放する戦いであると宣伝し，国民の多くは，それを信じ協力しました。

戦争がはげしくなると，国内の戦時体制はさらに強化され，多くの若者が徴兵され，そのため不足した労働力の確保に，学徒動員や徴用が行われました。軍事産業中心の生産のため，食料品など日常の生活物資は不足し，国民の生活は日に日に苦しくなりました。

さらに，朝鮮や中国から多くの人たちが日本に強制的に連れてこられ，炭坑・鉱山などで苛酷な労働を強いられるなど，さまざまな形で多くの人々が犠牲となりました。

本土空襲へ

開戦当初，日本軍は，東南アジア各地や南太平洋の島々を次々と占領したものの，資源に勝るアメリカ・イギリスなど連合国がしだいに優勢となり，1942 年からアメリカ軍の反撃を受け，各地で敗北するようになりました。

1944 年になると，日本の本土はアメリカ軍の空襲を受けるようになりました。爆撃の対象は，各地の軍事施設や工場から都市の住宅地帯にまでおよび，市街地が焼け野原と化しました。特に，1945 年３月 10 日の東京大空襲は，B29 爆撃機の編隊が東京の下町を焼き尽くし，一夜で８万人以上の市民が犠牲となり，約 100 万人が焼け出されました。

このような状況におかれていましたが，軍部は，あくまでも本土決戦を考えていました。1945 年３月下旬，アメリカ軍は沖縄に上陸しました。その攻撃は地形が変わるほど激しく，多くの住民が戦争に巻き込まれ，痛ましい最期を遂げました。６月に占領されるまでの約３か月の間に，12 万人以上の人々が犠牲になりました。

３　長崎に原爆が落とされるまでの動き

原子爆弾（原爆）開発へ「マンハッタン計画」がスタート

1939 年１月，ウラン 235（以下ウランという）の原子核が分裂（核分裂）し，それが一気に連続して起きること（連鎖反応）によって，膨大なエネルギーが発生するという，「核エネルギー」が発見されました。

同年９月，世界が第二次世界大戦に突入するとともに，アメリカは「核エネルギー」を兵器に利用する原爆の研究に取り組みました。その過程でプルトニウム 239（以下プルトニウムという）も容易に核分裂を起こすことが発見されました。

また，ドイツも原爆を開発しようとしているとの情報もあり，アメリカはドイツよりも先に原爆を完成させなければならないと考え，1942 年８月，原爆開発のためのプロジェクト，いわゆる「マンハッタン計画」をスタートさせました。

この計画には，当時のお金で 20 億ドルという巨費が投じられました。広大な土地，膨大な電力と水を要し，関連部門まで含めると最大時には 54 万人もの科学者・技術者・軍人が関わり，わずか４年ほどの間に原子爆弾は造られました。

攻撃目標はドイツから日本へ

原爆は，他の兵器と比較にならないほどの強大な破壊力を持つ爆弾であり，戦争を終結させるため，ドイツに対して使うことを第一の目的に開発が進められていました。しかし，原爆が完成する前の 1945 年５月８日にドイツが降伏し，ヨーロッパでの戦争は終結しました。

それまで，日本への使用も検討されていましたが，「日本を降伏させるためにあえて原爆を使う必要はない」との意見もあり，原爆を使用すべきかどうかが大きな問題となりました。しかし，当時国際的な影響力を増しつつあったソ連に対し，アメリカが原爆の強大な破壊力を示すことによって，戦後優位な立場を築くことなどの様々な目的のため，日本へ原爆が使用されることとなっていきました。

原爆無警告使用反対の意見を無視

原爆投下に関する諸問題を検討するため，アメリカは，陸軍長官をはじめ軍や科学者の代表ら８人で構成する「暫定（ざんてい）委員会」を設けました。1945 年６月１日，委員会では，①原爆を日本に対してできるだけ早く使用する，②民家に囲まれているか，または民家に隣接する軍事施設，軍事工場及び攻撃に弱い建築物に使用する，③原爆がどのようなものであるかの事前の警告を行わない，などの検討結果をまとめ，トルーマン大統領に報告しました。

これに対し７人の科学者で構成されたフランク委員会は，事前警告なしに原爆を使用することは世界の支持を失い，将来原爆の国際管理に害を及ぼすとして，「原爆は全連合国の代表の前で公開実験したあと，日本に警告し，拒否されるか，連合国の了解が得られた場合に使用を検討すべきである」とするなど反対の立場を取りました。これら原爆の無警告使用に反対する意見は，科学者の多くが支持しましたが，結局無視されました。

人類初の原爆実験

1945 年７月 16 日，アメリカのニューメキシコ州アラモゴードで人類初の原爆の爆発実験が行われました。当時アメリカは，ウランとプルトニウムを原料とする２種類の原爆を完成させていました。ウランを原料とする原爆は１個だけしか完成していませんでしたが，確実に爆発すると考えられていたため，実

験をすることなく第１目標地に投下されることになりました。プルトニウムを原料とする原爆は２個完成していましたが，その構造が複雑で，確実に爆発を起こすかどうかを確かめる必要もあり，実験が行われました。

原爆が強力な爆発を起こすことは予想されていましたが，実験をするまでどれほどの破壊力があるのかは正確に分かっていませんでした。実験によって，その威力が想像をはるかに超える強力な爆弾であることに科学者たちは大変驚きました。プルトニウムを原料とする原爆の実験が成功したことにより，第２目標地にプルトニウム型原爆が投下されることになりました。また，実験の結果はポツダム会談に出席していたトルーマン大統領に直ちに報告されました。

投下目標都市は広島，小倉，新潟そして長崎へ

原爆の投下目標都市は，次のような基準で検討されたと言われています。

①爆発により日本国民が戦争を続ける意志をなくさせるような都市。

②軍の司令部，軍隊の駐屯地，軍需工場などのいずれかがあるような都市。

③空襲による損害を受けず，原爆の威力や効果が分かりやすい都市。

中でも③の「原爆の威力と効果が分りやすいこと」が重要な基準だったようです。

その結果，投下目標都市は，当初，東京や京都など 17 の都市が検討対象にあげられ，その中から広島・小倉・新潟の３都市にしぼられました。長崎はその後追加され，最終的に広島，小倉，長崎となりました。

広島・長崎への原爆投下

1945 年８月６日，ウラン型原爆「リトルボーイ」が南太平洋のテニアン島にあるアメリカ軍基地でＢ 29 戦略爆撃機エノラ・ゲイに積まれ，広島に投下されました。人類史上初の原爆は，広島の市民など約 14 万人の命を奪いました。

[広島の被害の状況]

投下日時	1945（昭和 20）年８月６日午前８時 15 分
投下爆弾	「リトルボーイ」ウラン型原爆（４トン）
死　　者	14 万人±１万人（当時の人口約 35 万人）
全焼・全壊家屋	51,787 戸

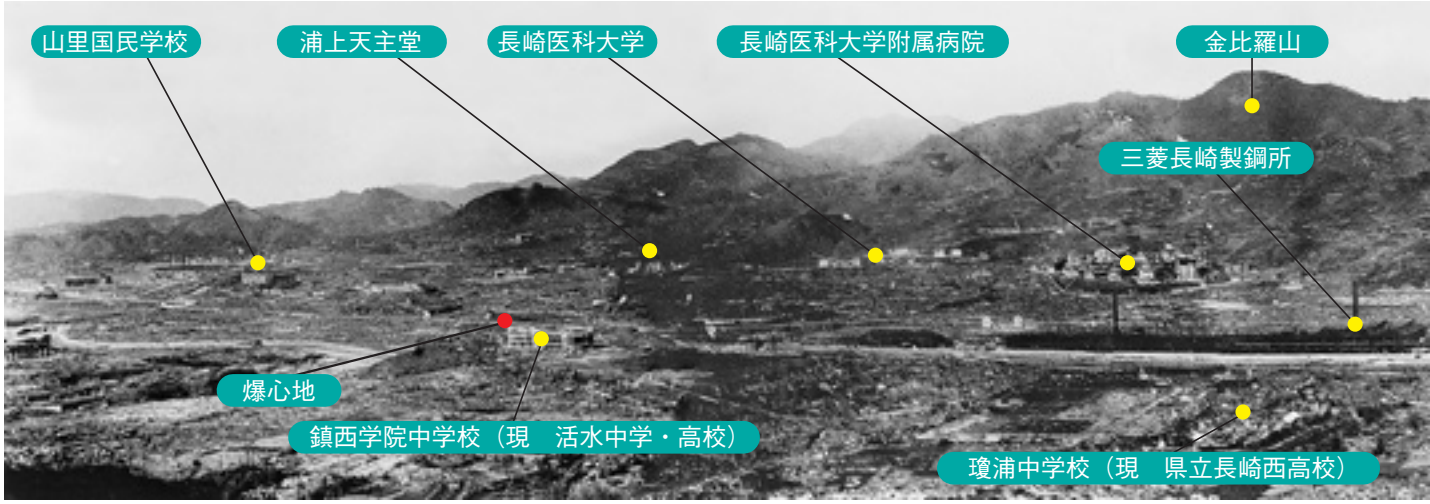
（注）広島市の被害は，昭和 51 年「国連への要請書」と昭和 21 年８月広島市調査による。

その３日後の８月９日，同じくテニアン島を出発したＢ 29 ボックス・カーは，プルトニウム型原爆「ファットマン」を積み，第１目標となっていた小倉上空に達しました。小倉には前日の八幡爆撃による煙やもやが立ち込め，肉眼による目標地点の確認ができなかったため投下を断念し，第２目標の長崎に向かいました。しかし，長崎の町も厚い雲に覆われていました。すでに爆撃機の燃料は底をつきつつあり，長崎への投下には時間的な余裕もありませんでした。爆撃手※は投下予定地点を確認できないまま，突然雲の切れ間から現れた浦上の町をみつけて原爆を投下したと言われています。

長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」

※　投下予定地点：原爆は長崎市北部の松山町に投下されましたが，予定地点は市中心部の賑橋（にぎわいばし）付近であったことが，米国の資料から明らかになっています。

4　原子爆弾の被害・惨状



稲佐山中腹から見た被爆後の長崎港から浦上一帯

原子爆弾とは

ウランやプルトニウムに中性子を衝突させたときに原子核が核分裂し，中性子が飛び出すと共に，高いエネルギーが発生するという現象を利用した兵器で，爆発した瞬間に巨大な火の球が形成され猛烈な爆風や熱線，放射線を放出しました。

原子爆弾の人的被害

当時の長崎市の人口はおよそ 24 万人でしたが，原子爆弾による被害は，次のように推定されています。

死　　者　73,884 人
負 傷 者　74,909 人
被災戸数　18,409 戸（半径４km以内の全戸数，市内戸数の約 36％）
＊原爆資料保存委員会の報告（昭和 20 年 12 月末までの推定　昭和 25 年７月発表）

熱線による被害

火球から放出された大量の熱線は，爆発から３秒ほどの短い時間に，異常な高熱で地上を包みました。地表面の温度は爆心地で 3,000℃から 4,000℃，１km離れたところでおよそ 1,800℃，1.5km付近でも 600℃以上に達したものと推定されています。熱線が届いた距離は，浦上地区の地形と関係するので一様ではありませんが，その影響は遠くまで及び，爆心地からおよそ４km離れたところでも屋外にいた人は熱傷を負うほどでした。

爆心地の近くでは，熱線のすさまじいエネルギーによって燃えるものすべてが火をふきました。溶けたガラス，沸騰して泡立った瓦，焦げて黒くなった石などが，その激しさを物語っています。

長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター資料

小川虎彦氏　撮影

また，熱線のわずか数秒間の高熱が，人々の皮膚にも浴びせられました。熱線のすさまじさは通常の火傷（やけど）では考えられない被害をもたらしました。重傷になると，表皮は焼けただれてズルズルとはがれ落ち，皮下の組織や骨までが露出しました。爆心地から 1.2㎞以内では，熱線だけでも致命的で，爆心地付近ではあまりの高熱に一瞬のうちに身体が炭化し，内臓の水分さえ蒸発したと考えられています。

浦上天主堂　　石田壽氏　撮影

爆風による被害

爆心地から 1 ㎞以内では，一般の家屋は，原形をとどめないまでに破壊されました。鉄筋コンクリートの建物などがところどころに残りましたが，いずれも建物とは名ばかりの無残（むざん）な状態でした。つぶれたり，大きく変形したりしたありさまが，爆心の方向を指し示していました。このようなすさまじい爆風に人々は吹き飛ばされ，散弾のような無数のガラスや木片を全身に浴びました。

火災による被害

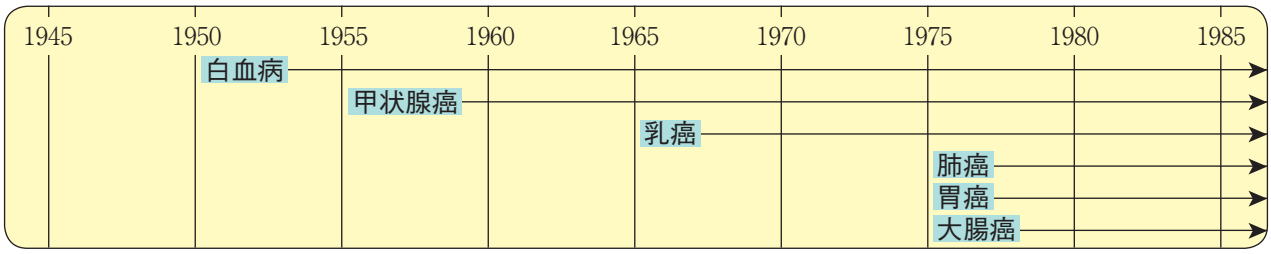
熱線と爆風による被害は，火災によってさらに増大しました。爆風の被害が家屋の半壊程度ですんだところも，後で起きた火災のために結局全焼しました。全焼・全壊家屋 12,900 戸，半壊以上の家屋は 5,509 戸にのぼっています。

火災は，犠牲者の数も増大させました。倒れた家の下敷きになっても，火さえこなければ外傷だけで助かったはずの人が多数いました。

長崎県庁を中心とした市街地　　H・J・ピーターソン氏　撮影

放射線による被害

原子爆弾がほかの爆弾と最も異なる点は爆発したときに大量の放射線を※照射する点です。放射線は自然界にも存在しますが，1895年にレントゲンによりX線が発見され，現在では医療用の放射線などが人工的なものとしてよく知られています。放射線は五感では全く感じることができないものですが，物質や人体を透過する力が非常に大きく，その際に細胞や遺伝子に異常を引き起こします。損傷の程度は被爆した量によって異なりますが，爆心地から1㎞以内で被爆した人のうち，無傷であっても，その大多数の人が死亡しています。放射線の破壊力は，それほど強烈でした。人体に及ぼす害は，爆発のときだけでは終わりません。原爆爆発の瞬間に放出された放射線のほか，爆発した時の燃え残りの物が地上降下（いわゆる「死の灰」）したものや，またこの放射性物質が混じったものが降雨（いわゆる「黒い雨」）したものなどの残留放射線により被爆した人も多いといわれています。放射線は身体の奥深くを傷つけ，時がたつにつれて様々な症状を呼び起こします。あの夏に始まった放射線障害の苦しみは，いまだに消えることはありません。　※照射　光線をあてて照らすこと。



急性期の障害

放射線による初期の障害は，被爆直後から現れました。嘔吐（おうと），下痢，発熱，皮下出血，口内炎などの症状が重なり，近距離被爆者ほど重傷でした。日増しに全身が衰弱し，１週間たった頃から死亡者が急増しました。放射線の被爆から１週間目頃になると，脱毛症状が現れ，３週間目頃にはピークに達しました。この症状は近距離被爆者に多く認められ，脱毛は１～２週間続きました。見えない放射線を浴びた被爆者は，束のように抜け落ちる髪を見て不安におののきましたが，８～10週目頃になって再生し始めました。

原爆白内障（はくないしょう）

目の水晶体が白く濁るのが白内障ですが，原爆白内障は，早い人で被爆後約10か月で発症しました。障害の程度は，被爆線量と被爆時の年齢に関係しており，爆心地から近距離で被爆した人ほど高い発症率でした。また，重症の白内障ほど早く現れ，軽症の場合は潜伏期が長く，数年たって発症した例もあります。白内障といえば，一般に老人特有の病気ですが，原爆白内障は年齢に関係なく発症する点に特徴があります。

小頭症（しょうとうしょう）

放射線は胎児（たいじ）にも影響を及ぼしています。流産や死産の頻度が高く，出生児の中には小頭症も現れました。小頭症は，妊娠から16週未満の胎齢で被爆した場合に多く認められました。脳全体が発育不全で小さく，構造に奇形がみられることもありました。また，脳以外にも先天性白内障などの症状を併せもった例も少なくありません。

白血病

血液の癌（がん）といわれる白血病は，被爆から６年たった1951年をピークに現れました。血液や造血組織は放射線の影響を受けやすく，被爆線量が増えるほど高い頻度で発病しました。年齢とも関係があり，若年者ほど早い時期に発病しました。白血病発生の調査は現在も続けられていますが，1951年前後にみられたような多発傾向は，その後現れていません。

癌（がん）

放射線障害は白血病で終わったわけではありません。10年後から現在にいたるまで，被爆者に不安を与えているのはいろいろな臓器の癌です。なぜ長い潜伏期（せんぷくき）を経て発病するのか明らかではなく，人類がはじめて経験した大災害の影響に対して，これからも絶え間ない研究が望まれます。

5　被爆者の声

長崎で被爆し，かろうじて生きのびた方の中には，被爆者であることがわかると差別されるかもしれないという不安もありましたが，この原爆の恐ろしい体験や廃墟と化した長崎の悲惨な状況，それから核兵器を世界からなくしてほしいという強い願いを伝えるため，勇気をもって証言してくださる人々がいます。

みなさんもこのような証言を読んだり，「語りべ」の方の話を聞いてこの貴重な体験と願いを後世までずっと伝えていきましょう。

46年後に知った姉の最後　　奥村アヤ子　（被爆当時８歳）

私は46年ぶりに，姉の友人だった大塚みち子さんにお逢いし，私の家族のことや姉のこと，私のことを知りました。姉は真黒に焼かれ，パンツのひもだけが残っていたそうです。

隣組の防空壕の前で，かすかな声で大塚さんに「みっちゃん，水，水。」と呼びかけたそうです。無残な姿で，今にも死にそうな声だったので，大塚さんが「貴方は誰なの」とたずねると「私はキョウコよ」と答えたとのこと。それが私の姉の京子だったのです。大塚さんからこのことを聞いて，私はびっくりしました。全身を焼かれ，家から防空壕までかなりの距離の坂道をどのようにしてたどりついたのか，母と一緒だった姉は，母と二歳の弟が家屋の下敷きになっていることを伝えたい一心で最後の力をふりしぼって登ってきたのでしょう。それなのに誰にも会えず，その日の夕方亡くなったのだそうです。防空壕の前で亡くなったのは，姉が最初だったそうです。

その後は次から次と亡くなる方が続き，防空壕の前はお墓になったと，大塚さんは言っていました。お墓といっても，防空壕を掘ったときの土があったのをかぶせただけのものだったとか。それでも他の家族は，その後それぞれに遺体を引き取り，火葬し，お骨にされたそうですが，私の姉の遺体は引き取り手もなく遺骨はどうなってしまったのか分りません。

大塚さんは，姉に「水，水」と言われても，近くに水はなく，飲ませてやれなかったのが心に残り，自分の家の仏壇に私の姉の分として，46年間供養して下さっていたそうです。

「ピーストーク　きみたちにつたえたいＶ－原爆で家族を失った－」（財）長崎平和推進協会

奥村さんは，被爆当時は城山国民学校の３年生。爆心地から500ｍの城山町で被爆し，父母，兄弟の家族全員を亡くしました。家族全員が別の場所で亡くなり，その上裸で焼かれ，土に還ってしまったため，奥村さんは，家族全員が亡くなった場所の土をそれぞれに頂いてきて，新しい下着を添えて，被爆から46年がたって，家族全員を一緒のお墓に眠らせたそうです。

● あなたの感想を書いてみましょう

「心の傷」

生き残った市民の一人一人は，「私はひきょう者だった」「私は彼を見殺しにした」などと己を責めた。原爆はあらゆるものを灰燼化（かいじんか）したばかりでなく，かけがえのない互いの心をもバラバラに引き裂いてしまった。彼らは癒（いや）しがたいうずきを感じながら，独りいては後悔に胸を打ち，隣人を見ては，また，胸を打ちつつ生きねばならなかった。

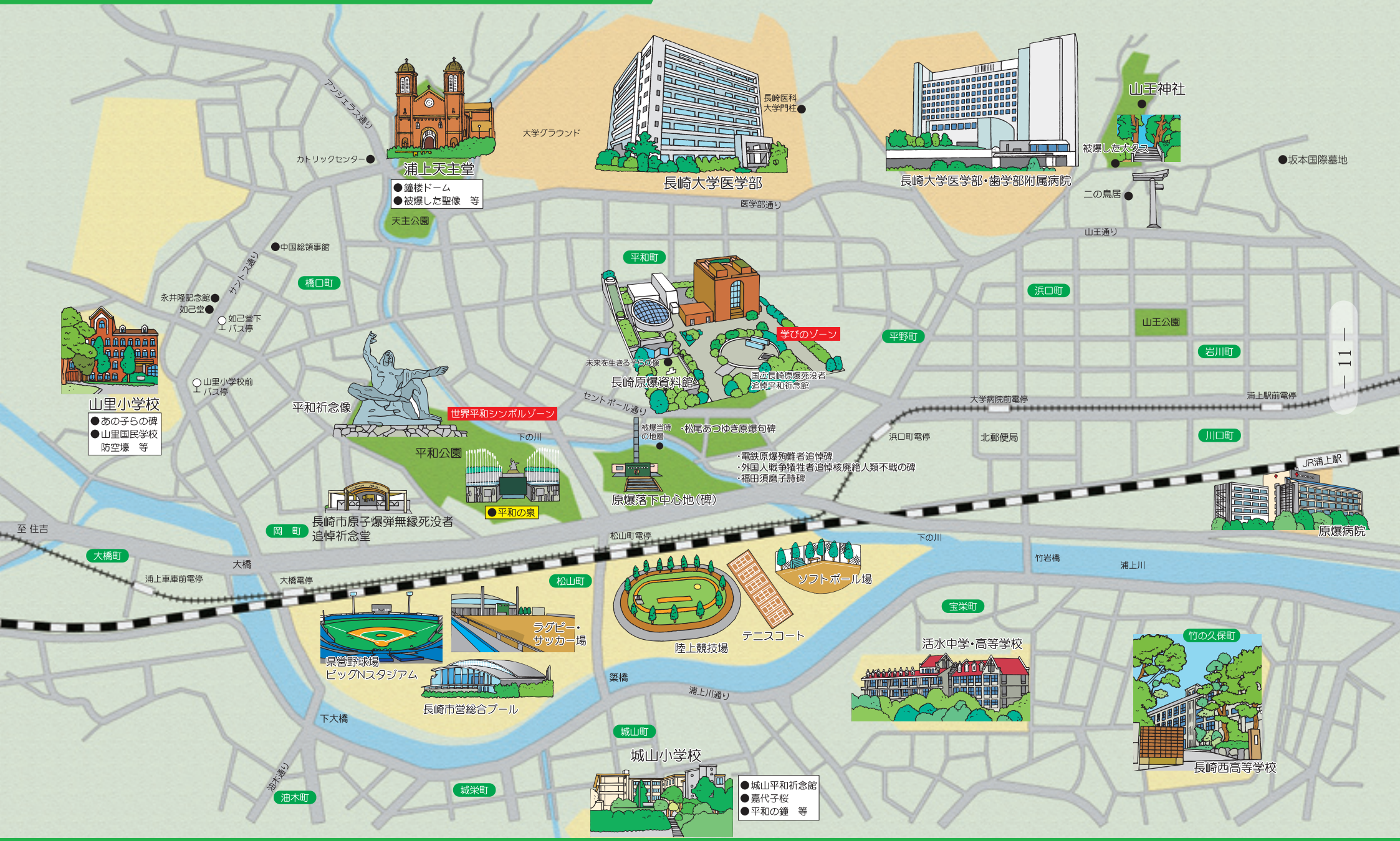
「私たちは長崎にいた」永井隆著

永井隆博士は，爆心地からわずか700ｍしか離れていない長崎医科大学附属医院で被爆しました。自らも深い傷を負ったその直後から，負傷者の救護や原爆障害の研究に献身的に取り組みました。被爆から約６年の命でしたが，その間の執筆活動を通して，被爆した人々を励まし続けました。

●永井隆博士の著作を読んで，心に残った言葉を書き出してみましょう。

著作名

被爆建造物等の紹介


アンジェラス通り
カトリックセンター
浦上天主堂
●鐘楼ドーム
●被爆した聖像　等
天主公園
大学グラウンド
長崎医科大学門柱
長崎大学医学部
医学部通り
長崎大学医学部・歯学部附属病院
被爆した大クス
山王神社
坂本国際墓地
二の鳥居
山王通り
中国総領事館
サントス通り
橋口町
永井隆記念館
如己堂
如己堂下バス停
山里小学校前バス停
山里小学校
●あの子らの碑
●山里国民学校防空壕　等
平和祈念像
世界平和シンボルゾーン
平和公園
下の川
●平和の泉
長崎市原子爆弾無縁死没者追悼祈念堂
岡　町
至 住吉
大橋町
大橋
浦上車庫前電停
大橋電停
平和町
学びのゾーン
未来を生きる子らの像
長崎原爆資料館
国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
セントポール通り
被爆当時の地層
・松尾あつゆき原爆句碑
・電鉄原爆殉難者追悼碑
・外国人戦争犠牲者追悼核廃絶人類不戦の碑
・福田須磨子詩碑
原爆落下中心地（碑）
平野町
浜口町
山王公園
岩川町
川口町
大学病院前電停
浦上駅前電停
浜口町電停
北郵便局
JR浦上駅
原爆病院
松山町電停
下の川
竹岩橋
浦上川
松山町
ソフトボール場
ラグビー・サッカー場
陸上競技場
テニスコート
県営野球場
ビッグNスタジアム
長崎市営総合プール
築橋
浦上川通り
下大橋
宝栄町
活水中学・高等学校
竹の久保町
長崎西高等学校
城山町
城山小学校
●城山平和祈念館
●嘉代子桜
●平和の鐘　等
油木通り
油木町
城栄町

おもな碑や被爆建造物等の説明

平和の泉　のどが乾(かわ)いてたまりませんでした

原爆によってやけどをおった人々は，みんな水を求めてさまよい歩きました。「水が飲みたい」…そんな気持ちで亡くなった人々に水をささげ，冥福(めいふく)を祈るために作られたのがこの泉です。

この泉の正面の石碑には次のような文字が刻み込まれています。

> のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。
>
> ―　あの日のある少女の手記から　―

原子爆弾落下中心地（碑）　８月９日，午前 11 時２分

1945（昭和 20）年８月９日，午前 11 時２分，この碑がある松山町の上空 500m で原子爆弾が爆発しました。

死　者…… 73,884 人
負傷者…… 74,909 人
家屋の全焼…… 11,574 戸
家屋の全壊…… 1,326 戸
家屋の半壊…… 5,509 戸

＊原爆資料保存委員会の報告
昭和 20 年 12 月末までの推定
（昭和 25 年７月発表）

この地を中心に，長崎の町は大きな被害を受けました。
この碑は高さ 6.6m で，三角柱表面の張り石は黒御影石(みかげいし)です。

被爆当時の地層

平成８年，下の川の工事を行った際に，被爆後の復興で埋め立てられた，当時の地表面が地層として発見されました。

ここには，原爆によって壊された家の瓦やレンガ，熱によって焼けた土や溶けたガラスなどが現在でも大量に埋まっています。

被爆当時の悲惨な様子を示す資料としてこの一部を現地に保存しています。

未来を生きる子らの像　中学生が中心となり建立

原爆投下から10日過ぎたある日，晴れ着姿に薄化粧をした日本人形のような美しい二人の少女が※茶毘（だび）にふされる姿を偶然目にした少年は，その悲しくも美しい情景が頭から離れることなく，29年後に「悲しき別れ―茶毘」を描きました。その後亡くなった少女の一人のおかあさんが京都府綾部市に住んでいることが偶然にわかりました。

やがておかあさんの「犠牲者の供養をしたい」という願いを知った綾部市立綾部中学校の生徒たちが中心となり「長崎にふりそでの少女像をつくる会」を結成し，街頭募金などでその資金の多くを集め「未来を生きる子ら」の像を建立しました。

現在，「悲しき別れ―茶毘」の原画は原爆資料館に，「未来を生きる子ら」の像は同館屋上庭園にそれぞれ展示・設置されています。また，そのせつない物語は，絵本「ふりそでの少女」に詳しく書かれています。

※茶毘…火葬すること。

電鉄原爆殉難者追悼碑　※学徒動員中に被爆

路面電車は太平洋戦争末期もいまと同じく長崎の重要な交通機関でした。その電車の運転士や車掌として中学校以上の若い男女の生徒らが学徒動員されていました。原子爆弾により電車のハンドルを握ったまま，車掌カバンを抱いたまま，中には12歳の少女車掌を含め110余人の命が多くの乗客と共に犠牲になりました。

※学徒動員……戦時中徴兵により不足した労働力を補うため，大人の代わりに生徒らを強制的に労働させたこと。

外国人戦争犠牲者追悼核廃絶人類不戦の碑　外国人戦争犠牲者の慰霊

日本が戦争をしていたころ長崎には連合軍の捕虜や，強制的に連れてこられた朝鮮人や中国人が多くいました。爆弾が落とされた時，被害は日本人だけでなくこのような多くの外国人にもおよびました。空襲や原爆など長崎で戦争により亡くなった外国人や，遠くアウシュビッツの強制収容所で餓死（がし）刑の身代わりとなり死亡したコルベ神父を追悼し，核兵器廃絶，人類不戦の誓いを込めて関係者により，太平洋戦争40周年の日に建立されました。

福田須磨子詩碑　原爆の後遺症に苦しんだ詩人

福田須磨子は，長崎で被爆，1955（昭和30）年に後遺症が発病し，その後たび重なる入退院と生活苦のなかで原爆の非人道性を訴えるとともに，数多くの平和を願う詩や著書を残しました。この碑には「新しき年の始めに／しみじみとわが生命愛（いと）しむ／原

爆の傷痕胸にみちしまま／絶望と貧苦の中で／たえだえに十年／げにも生きて来しかな」にはじまる「生命を愛しむ」という詩が刻まれています。1974 年 4 月に 52 才で永眠。詩集『原子野』 自伝『われなお生きてあり』など。

松尾あつゆき原爆句碑　原爆で家族を失った俳人

「なにもかもなくした手に四枚の爆死証明」

俳人松尾あつゆきは，長崎で被爆，３人の子供そして妻の４人を原爆投下後のわずかな期間につぎつぎと亡くしました。

「配給通帳，しんじつふたりとなりました」

学徒動員中に被爆した長女と二人きりになったあつゆきは，その後，日夜生死をさまよう長女の看護をしながら日記を書きました。翌年からその日記をもとに自由律俳句を句作。句集『原爆句抄』に二百の句と被爆体験や肉親との別れを淡々と綴った手記『爆死証明』を収めています。

嘉代子桜　学徒動員中に被爆

当時県立長崎高等女学校４年生（いまの高校１年生）だった林嘉代子さんは城山国民学校内で学徒動員で働いていて被爆し，亡くなりました。両親は，原爆投下後 22 日目に崩れた校舎のなかに，嘉代子さんの遺骸をようやく見つけ校庭で火葬しました。「ピカドン（原爆）の後には 70 年間は草木が生えない」と噂されていましたが，嘉代子さんをはじめ学校で亡くなられた多くの方のため，嘉代子さんが大好きだった桜を植えました。いまでもこの桜は毎年春になると鮮やかに満開し，かわいい１年生をむかえています。碑は 1966（昭和 41）年，城山小学校の先生方が嘉代子桜の由来と平和の願いをいつまでも語り継ごうと建立しました。

あの子らの碑　ああ　あの子が生きていたならば

原爆で死亡した山里国民学校教師・児童約 1,300 人とその親兄弟姉妹の霊を慰めるとともに，永遠の平和を願う碑です。

当時病床にあった永井隆博士の発案によって，同校の生き残り児童が肉親や友達を失った悲しみと「原子爆弾をつかう大戦争を，再び起こしてくださるな！」という願いを込めて作成した手記集『原子雲の下に生きて』の印税と博士の寄付によって建立しました。傍らに立つ「平和を」と「あの子らの碑」の小さな石柱は，永井博士の書です。

調べてみよう

ここで紹介している碑はほんの一部です。爆心地から離れた場所でも，原爆に関する碑はたくさん作られています。例えば凧揚げで有名な『唐八景公園』の中にも石碑があります。

みなさんの周りにも，あまり知られていないかもしれないけれど，平和を願う人々の思いが込められた碑などがあるかもしれません。家の人や近所の人に聞いたりして探しだし，どのような碑なのか調べてみましょう。

7　被爆者に対する援護や現状

1945年８月，広島，長崎において，原子爆弾によって多大な惨禍（さんか）を経験した被爆者は半世紀以上が経過した今なお，身体，暮らし，心のすべての面にわたる苦しみをかかえながら暮らしています。

とりわけ，被爆者を苦しめているのは，ケロイド，白血病，貧血その他の血液の異常，白内障，甲状腺癌，肝臓癌，乳癌などの後遺症と，その後遺症にいつかかるかわからない不安です。そのうえ，すべての身寄りを一度に失って一人きりになってしまった被爆者や，身体が悪くて働けないため厳しい生活を余儀なくされている被爆者もいます。加えて，高齢化が進み，健康上，生活上の悩みが一層深刻になってきています。

日本では，戦後，こうした被爆者のための法律が制定され，健康診断の実施，医療費の給付や各種手当制度が整備されてきました。被爆50年を前にした1994（平成６）年には，被爆者に対する総合的な援護対策を実施する法律として被爆者援護法が制定されました。

原爆は多くの外国人にも計り知れない惨禍をもたらしました。特に強制的に連行され工場などで働かされていた朝鮮人とその家族は長崎市内だけでも１万数千人いたと言われています。この他に，中国人労働者や華僑（かきょう），台湾からの留学生，あるいは幸町などの捕虜収容所のイギリス人，オランダ人らの捕虜もいました。このように多くの外国人も被爆し，数千人が亡くなったと推定されています。

外国人被爆者のうち，日本に住んでいたり，滞在している被爆者は医療費の給付などの援護措置を受けられますが，経済的理由で日本に来られない在外被爆者（外国人及び海外在住日本人）のために，2002（平成14）年６月に，被爆者健康手帳の取得や日本での治療を受けるための日本までの渡航旅費を援助する制度が設けられました。

その後も，被爆者に対する援護の制度が改正されています。くわしくは長崎市の原爆被爆対策部のホームページを見てください。

原爆彫刻
《何故―私を自由にしたのが原爆だったとは》
レネ・シェーファー作

（注）原爆彫刻
左の写真は長崎の捕虜収容所に収容されていたオランダ人，レネ・シェーファー氏が収容所の近くで作業中に被爆した体験をもとにそのときの様子を彫刻で表現したものです。作品は長崎市に寄贈され，現在原爆資料館に展示されています。

8 核兵器廃絶に向けて

核兵器の開発競争と軍縮

広島・長崎への原爆投下後まもなく第二次世界大戦は終結しましたが，その後の世界はアメリカとソ連（現ロシア）を中心に東西両陣営に分断され，激しく対立しました。米ソをはじめとしイギリス，フランス，中国が相次いで核実験を行うとともに膨大な数の核兵器（原爆より強力な水爆など）を保有していく核軍拡が行われてきました。

一方でこれを放置しておくと，核兵器を持とうとする国が増えることが心配されたため核不拡散条約（NPT）によりすでに保有している五つの国だけが核兵器を保有してよいこととしました。また，核兵器の多くを保有している米ソ間の交渉によりいろいろな種類の核兵器を徐々に減らしていこうとする努力が行われてきました。

1945 年	広島・長崎へ原爆が投下された
1950 年	ストックホルム・アピール
1954 年	ビキニ事件（第五福竜丸）
1963 年	部分的核実験禁止条約（PTBT）調印
1968 年	核不拡散条約（NPT）調印
1987 年	中距離核戦力（INF）条約調印
1989 年	ベルリンの壁崩壊，冷戦終結
1995 年	核不拡散条約の無期限延長を決定
1996 年	包括的核実験禁止条約（CTBT）が国連で採択
2002 年	戦略攻撃兵器削減条約（モスクワ条約）調印

核兵器に反対する運動と核実験の禁止

1950（昭和 25）年スウェーデンの首都ストックホルムで平和擁護（ようご）世界大会が開かれ核兵器禁止の署名運動を全世界に呼びかけ５億人の署名を集めました。しかし，日本では占領と朝鮮戦争のさなかであり，また，広島・長崎の被爆の惨状が発表されていなかったため，本格的な運動は次のビキニ事件を待たねばなりませんでした。

1954（昭和 29）年太平洋の赤道海域で操業していたマグロ漁船第五福竜丸が，マーシャル諸島にあるビキニ環礁でアメリカが行った水爆実験による死の灰（大量の放射能を含んだサンゴ礁の細かいチリ）により被災し，無線長の久保山愛吉さんが死亡する事件がありました。

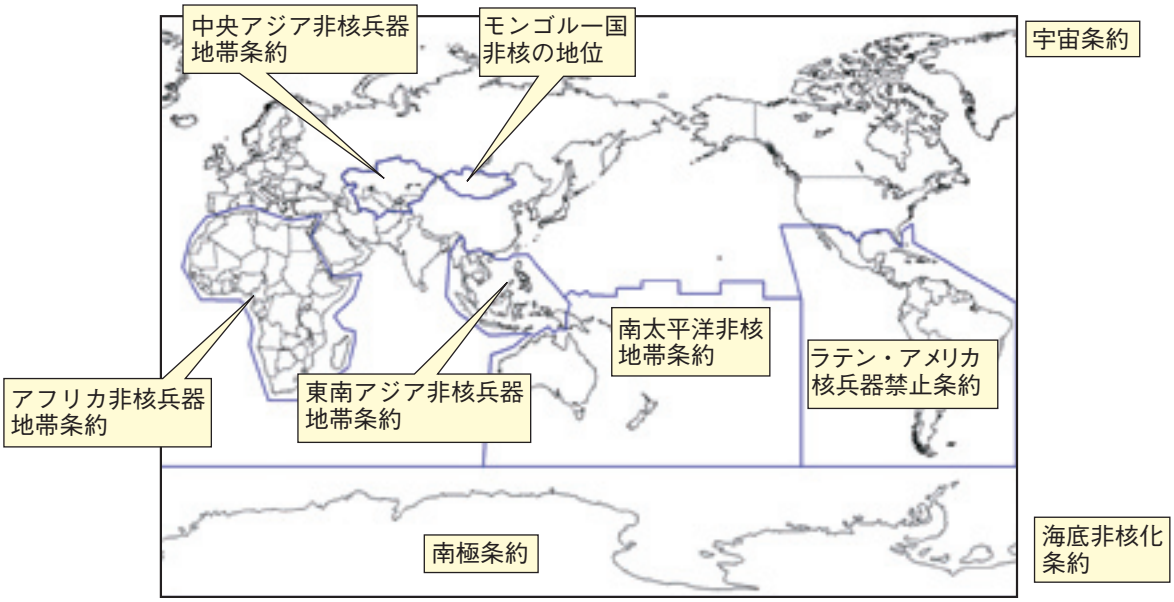
この事件をきっかけに原水爆の使用と実験の無条件停止を求める署名活動が始まり，翌年には，初の原水爆禁止世界大会が開かれました。その後，方針の違いからいくつかの団体に分かれましたが，海外の団体と協力して核兵器反対のための活動が続けられています。

また，核実験が環境に与える悪影響や批判などから大気中での核実験を禁止する条約が 1963（昭和 38）年アメリカ，イギリス，ソ連で結ばれました。しかし，その後，地下で核実験が行われるようになりました。現在では地下を含めて核爆発を伴うあらゆる核実験を禁止する条約が国連で採択されましたが，反対する国も多く，効力を持っていません。また，この条約では核爆発を起こさない核実験（いわゆる臨界前核実験）が禁じられていないとして今もなお実施している国もあります。

冷戦後の状況と広がる非核兵器地帯

核兵器による不安が世界中に広がるなかで，特定の地域の関係国がお互いに核兵器が排除された状態をつくる非核兵器地帯が南半球を中心に設置されていきました。

冷戦は終結しましたが，なお世界には 26,000 発を超える核兵器があるといわれ，我々が住むアジアでも核兵器が使われる可能性は否定できません。今後日本や朝鮮半島を中心とした北東アジア非核兵器地帯の創設に向けて政府や NGO（非政府組織）の努力が期待されています。



広がる非核兵器地帯

9　長崎の青少年が参加している平和活動

原爆による惨禍を体験した長崎市では，核兵器が再び使われることがないようにという私たち市民の願いを国の内外に広く伝えています。

毎年行われる長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では，市長が全世界へ長崎平和宣言を発表しています。また，1970（昭和45）年のフランスの核実験に対し抗議したのをはじめとして，これまでに500回を超える核実験への抗議を行うとともに，国連軍縮会議やNGO会議などの国際会議や海外での原爆展を開催しています。これらの催しに際しては，被爆者が「語りべ」として外国の人たちに被爆体験を話すことにより原爆の悲惨さを世界へ伝えています。

一方で長崎市では，未来を担うみなさんが被爆の実相を学ぶとともに，平和について学習していくことができるように「ナガサキ平和学習プログラム」としていろいろな機会を設けています。

青少年平和交流事業

青少年を対象とし，研修や交流活動をとおして，お互いの連帯と友情を深めながら平和の尊さと社会参加の意義を学ぶことを目的として行っています。

その中の一つとして，中学生が沖縄を訪問し，現地の中学生と一緒に，戦跡巡りや戦争体験を聞くなどの学習があります。（少年平和と友情の翼）

平和の灯

毎年８月８日に，主に市内の子供たちが平和への願いを込めて作製した手作りのキャンドルを灯すことにより，戦争の悲惨さと平和の尊さを伝え，発信しています。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

毎年原爆投下の８月９日に，原爆犠牲者の霊を慰め，あわせて世界の恒久平和を祈り挙行しています。

この席上での長崎市長の平和宣言は，インターネットを通じて全世界に発信し，核兵器の廃絶と世界恒久平和を訴え続けています。

原爆犠牲者慰霊・世界平和祈念市民大行進

市民の皆さんが参加して行進することにより，原爆犠牲者を慰霊し，世界に強く平和を訴えています。

世界平和祈念ポスター・標語展

毎年，世界平和を祈念するポスター・標語を募集し，入賞作品を原爆資料館に展示しています。

また，最近ではみなさんの先輩たちが，自主的に戦争や原爆について学んだり，核兵器をなくし，平和な世界を築くために何ができるかを話しあったりしています。みなさんも中学校を卒業したらこのような活動に参加してみましょう。

青少年ピースボランティア

15 歳（中学卒業）から 30 歳未満の青少年が，戦争や原爆について学んだり，平和についてさまざまな角度から考えています。また，青少年ピースフォーラムなどの平和に関する活動に取り組んでいます。

青少年ピースフォーラム

毎年８月８・９日に全国から集まった青少年が，平和に関する問題について話しあい，被爆の実相と平和の尊さを学びます。

高校生平和大使（主催：民間）

核兵器廃絶を求める「高校生一万人署名」などの被爆地からのメッセージを国連欧州本部などに届けています。

長崎市の小・中学生の平和の取組み

■平和祈念式　～永井隆博士生誕 100 年～　（山里小学校）

山里小学校では，永井隆博士にゆかりの「あの子らの碑」の前で，平和を誓う「平和祈念式」を毎年 11 月に行っています。今年は，43 歳で亡くなられた永井博士が生きていたら 100 歳を迎える記念の年でした。

■平和の願いを絵で表そう　～キッズゲルニカ～　（土井首小学校）

画家ピカソは平和をテーマにゲルニカという作品を残しました。キッズゲルニカは，この作品と同じ大きさの絵を子どもたちで表現しようとする取組みです。土井首小学校の６年生が平和の願いを込めて描きました。

■海外の中学生と平和について語り合おう　（滑石中学校）

修学旅行で長崎に来たシンガポールの中学生に，平和をテーマにした劇を披露しました。その後，平和について英語で意見交換をしました。国は違っても，平和に対する思いは同じであると感じました。

平和学習発表会

中学生のみなさんが，各学校で日頃取り組んでいる平和学習の成果などを発表し，またその取り組みを知る機会として，市内の全ての市立中学校及び一部の私立中学校の生徒，教員，保護者の代表が参加しています。

～ホームページの活用～

これまでご紹介した長崎の青少年の平和活動については，ホームページ上でも見ることができます。また，被爆遺構のくわしい解説などもありますので，ぜひ活用してください。

■長崎市平和・原爆ホームページ　（アドレス）http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/abm/index.html

※「長崎市平和・原爆ホームページ」は，平成21年4月にリニューアル予定

長崎市平和・原爆ホームページ
おもな掲載内容（予定）

○原爆資料館	○核兵器の廃絶へ
○原爆の記録	○平和関係団体の紹介
○教材の貸し出し	○平和への取り組み
○被爆体験講話	○平和学習
○平和公園周辺マップ	○キッズ平和ながさき
○長崎平和宣言	

「平和ナガサキ　（中学生用）」参考文献

長崎市編「長崎原爆戦災誌」
長崎市編「長崎市制六十五年史」
長崎市編「被爆建造物等の記録」
長崎市編「碑は訴える」
長崎市編「ながさき原爆の記録」
長崎市編「原爆被爆記録写真集」
長崎市編「長崎原爆資料館ガイドブック」
長崎市編「原爆被爆者対策事業概要」
核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会編「核兵器廃絶―地球市民集会ナガサキ報告書」
「長崎原爆資料館　資料館見学・被爆地めぐり「平和学習」の手引書」　（財）長崎平和推進協会
「ピーストーク　きみたちにつたえたいⅤ」　（財）長崎平和推進協会
永井　隆著「私たちは長崎にいた」　サンパウロ出版社
永井　隆著「原子雲の下に生きて」　サンパウロ出版社
松尾あつゆき句集「原爆句抄」　文化評論出版
福田須磨子詩集「原子野」
中学校教科書「新しい社会　歴史」　東京書籍
黒沢　満編「軍縮問題入門」　東信堂
小路敏彦著「長崎医科大学壊滅の日」　丸の内出版
山極晃ほか編「資料マンハッタン計画」　大月書店
レスリー・R・グローブス著「原爆はこうしてつくられた」　恒文社

保護者のみなさんへ

1945（昭和20）年８月９日，午前11時２分。美しい長崎の町は，米軍機から投下された，たった一発の原子爆弾により廃墟と化しました。

あの惨劇から半世紀以上を経過し，長崎の町が国際文化都市として復興する一方で，被爆の記憶は徐々に風化しつつあるように思われます。

また，この原爆の恐ろしさをありのままに伝えてくれる「語りべ」の方も，これから段々と高齢化していくなかで，この悲惨な体験と戦争の恐ろしさを次代を担う子どもたちに語り伝えていくことは本市の責務であります。

この平和学習資料によって，子どもたちが「あの夏の日」に長崎で起きたことや「平和への願い」を理解する一助となるとともに，保護者のみなさまにもぜひご一読いただき，ご家庭や地域などで，核兵器や戦争のない平和な世界について話し合っていただく契機になれば幸いです。

付　記

本教材は，平成13年10月，長崎市に提出された「ナガサキ平和学習プログラム検討委員会」からの提言書を受け，年間を通じて利用できる教材を提供する目的で作成しました。

当時８人の編集委員が作成したものに，加筆訂正を加えています。

平成15年３月31日初版発行
平成21年３月31日第７版発行
企画編集　長崎市原爆被爆対策部
　　長崎市教育委員会
発　　行　長崎市原爆被爆対策部
印 刷 所　㈲正文社印刷所

長崎市民平和憲章

私たちのまち長崎は，古くから海外文化の窓口として発展し，諸外国との交流を通じて豊かな文化をはぐくんできました。

第二次世界大戦の末期，昭和20年（1945 年）8月9日，長崎は原子爆弾によって大きな被害を受けました。私たちは，過去の戦争を深く反省し，原爆被爆の悲惨さと，今なお続く被爆者の苦しみを忘れることなく，長崎を最後の被爆地にしなければなりません。

世界の恒久平和は，人類共通の願いです。

私たち長崎市民は，日本国憲法に掲げられた平和希求の精神に基づき，民主主義と平和で安全な市民生活を守り，世界平和実現のために努力することを誓い，長崎市制施行 100 周年に当たり，ここに長崎市民平和憲章を定めます。

1　私たちは，お互いの人権を尊重し，差別のない思いやりにあふれた明るい社会づくりに努めます。

1　私たちは，次代を担う子供たちに，戦争の恐ろしさを原爆被爆の体験とともに語り伝え，平和に関する教育の充実に努めます。

1　私たちは，国際文化都市として世界の人々との交流を深めながら，国連並びに世界の各都市と連帯して人類の繁栄と福祉の向上に努めます。

1　私たちは，核兵器をつくらず，持たず，持ちこませずの非核三原則を守り，国に対してもこの原則の厳守を求め，世界の平和・軍縮の推進に努めます。

1　私たちは，原爆被爆都市の使命として，核兵器の脅威を世界に訴え，世界の人々と力を合わせて核兵器の廃絶に努めます。

私たち長崎市民は，この憲章の理念達成のため平和施策を実践することを決意し，これを国の内外に向けて宣言します。

平成元年 3 月 27 日　長崎市議会議決

長崎市平和・原爆ホームページ
http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/abm/index.html

	中学校
年	組
名前	